

行為としての小説

漱石研究を読んでみたい。

近年の漱石関係論文の異常発達は、癌細胞の発達に似て、私などその急増ぶりを一つ一つフォローすることはとても出来ない。漱石研究をまた研究するような論文も多くて、悪性の癌細胞の分裂にたどえる所以である。同工異曲といつて悪ければ異曲同工の「研究」が大学の紀要などに載つてい

うたた寝をすると夢の中に滑りこんでくる女は誰だろうと考える。そういう女は『三四郎』にも『そ

れから』にも登場する。そしてその原型は漱石が愛読した『文選』の楚夢だ、と思いあたる。

楚夢が高唐の高殿を眺めると、その上で雲氣が千變万化する。それは先王が高唐に遊んで昼寝した時、夢に一婦人が現れ、枕席を近づけさせていただきたいと言ふ。去るのぞんで、「朝は朝雲となり暮には雨となり、朝夕な陽台の下にあります」と言った。中國の詩では女のことこの楚夢の神女の故事にちなんで『雲雨』といふ男女の相思の情も情事の密な言い表わす由である。なるほど漱石の女はうたた寝する主人公のもとに「雲氣」を帯びてはいって来た。まぼろしはそりくと部屋のなかに這入る。仙女の波をわたるが如く、覺の上には人らしい音も立たぬ。閉づる眼(まなこ)の情を「雲雨」にたとえた。自然のなかから見る世の中だから確とは解らぬが、色の白い、髪の濃い、襟足の長い女である。

熊本の読者なら忘れもせぬ『草枕』の那美である。国文学研究といふ戸籍調べがはやつて那美さんは前田某女だということになつていた。が李哲権氏はそんなことより



平川祐弘が読む

柳敦子著

行為としての小説

新曜社・2472円

命するところに従つて昔の恋人三千代と代助が結ばれた時、

雨は依然として長く、密に、

物に音を立てて降つた。

二人は

雨の為に、雨の持ち乗す音の為に、世間から切り離された。同じ家に住む門野からも婆さんか

は北米から届いた。柳敦子氏の処

味を説き明かした李氏は中国延

えてきた。教室で活発なやりとり

大出身。才氣煥発な日本語文章

をした成果だが、ハーヴィードの

大学院生の声までがこの本のペー

ジを通して聞えてくる。サカキは

面白い。アツコの読みは鋭い。

いやそう言つてゐるに相違ない。理

由も切り離された。二人は孤立

がそれで、著者は『雁』『己』な

論のための文学理論の研究はつま

だ。

この本を読んだら那美さんがい

ちだんと面白い血の通つた女に見

えてきた。教室で活発なやりとり

をした結果だが、ハーヴィードの

大学院生の声までがこの本のペー

ジを通して聞えてくる。サカキは

面白い。アツコの読みは鋭い。

いやそう言つてゐるに相違ない。理

由も切り離された。二人は孤立

がそれで、著者は『雁』『己』な

論のための文学理論の研究はつま

だ。

この本を読んだら那美さんがい

ちだんと面白い血の通つた女に見

えてきた。教室で活発なやりとり

をした結果だが、ハーヴィードの

大学院生の声までがこの本のペー

ジを通して聞えてくる。サカキは

面白い。アツコの読みは鋭い。

いやそう言つてゐるに相違ない。理

由も切り離された。二人は孤立

がそれで、著者は『雁』『己』な

論のための文学理論の研究はつま

だ。

この本を読んだら那美さんがい

ちだんと面白い血の通つた女に見

えてきた。教室で活発なやりとり

をした結果だが、ハーヴィードの

大学院生の声までがこの本のペー

ジを通して聞えてくる。サカキは

面白い。アツコの読みは鋭い。

いやそう言つてゐるに相違ない。理

由も切り離された。二人は孤立

がそれで、著者は『雁』『己』な

論のための文学理論の研究はつま

だ。

この本を読んだら那美さんがい

ちだんと面白い血の通つた女に見

えてきた。教室で活発なやりとり

をした結果だが、ハーヴィードの

大学院生の声までがこの本のペー

ジを通して聞えてくる。サカキは

面白い。アツコの読みは鋭い。

いやそう言つてゐるに相違ない。理

由も切り離された。二人は孤立

がそれで、著者は『雁』『己』な

論のための文学理論の研究はつま

だ。

この本を読んだら那美さんがい

ちだんと面白い血の通つた女に見

えてきた。教室で活発なやりとり

をした結果だが、ハーヴィードの

大学院生の声までがこの本のペー

ジを通して聞えてくる。サカキは

面白い。アツコの読みは鋭い。

いやそう言つてゐるに相違ない。理

由も切り離された。二人は孤立

がそれで、著者は『雁』『己』な

論のための文学理論の研究はつま

だ。

新発見の連続また連続 「草枕」読む独自の視点

(福岡女子学院大学教授)

柳敦子著

物語内部の語り手だが、他の人物と同じ地平に生きることを忌避する。インテリが田舎者に対する

距離の取り方についていい。しか

も画工は静止したイメージにしか価値を認めないから物語の時間性も忌避する。ところがそんなお高くとまつて『余』が那美さんの身の上に興味を示すうちにつもりが、実は『余』こそ地元に観察され噂されていたこと

に気づく。その逆転、逆襲の説明が面白い。女学者の目は鋭いもの

も多い。悪性の癌細胞の分裂にたどる所以である。同工異曲といつて悪ければ異曲同工の「研究」が大学の紀要などに載つてい

る。

そんな中で斬新な切口ではつと

私の目を引いたのは李哲権氏の

『漱石と楚夢』で、『比較文学研

究』六十八号(恒文社、三八〇〇

円)の巻頭に載つている。漱石も

作中人物もうたた寝が好きで、い

つしかうとうと暗昧(こひ)の境

に逍遙していると「入口の唐紙が

なり暮には雨となり、朝夕な陽

台の下にあります」と言った。中

國の詩では女のことこの楚夢の

神女の故事にちなんで『雲雨』と

いい男女の相思の情も情事の密な

言い表わす由である。なるほど漱

石の女はうたた寝する主人公のも

とに「雲氣」を帯びてはいって来

た。まぼろしはそりくと部屋

のなかに這入る。仙女の波をわた

るが如く、覺の上には人らしい音

も立たぬ。閉づる眼(まなこ)の

情を「雲雨」にたとえた。自然の

なかから見る世の中だから確とは

解らぬが、色の白い、髪の濃い、

襟足の長い女である。

熊本の読者なら忘れもせぬ『草

枕』の那美である。国文学研究とい

う戸籍調べがはやつて那美さんは

前田某女だということになつてい

た。が李哲権氏はそんなことより